

第71回日本小児保健協会学術集会 教育講演5

若者支援，いまむかし
～無関心社会の罪，漂流する子ども達

佐々木絵美（一般社団法人JOY）

小児医療に関わる皆様にお話しさせて頂ける貴重な機会を頂きましたことに心から感謝申し上げます。私達一般社団法人JOYは函館に本部を置き、2021年から活動しております。法人設立前は医療とは関係のない雑貨店を経営しておりましたため、小児保健に関する専門的な知識があるというわけではありません。あくまでも私自身の体験して来た事に基づいて今回のお話をさせていただきます事をご理解いただけますと幸いです。

2021年に「生理の貧困」がニュースに大きく取り上げられました。その当時私は雑貨店を経営しており、店舗が通学路にあったため、学生たちの姿を常日頃から見る機会が多くありました。そのこともあり「もしかして、函館でも生理用品の事で困っている子ども達が居るかもしれない」と思い、その思いを何とか形にすべく生理用品無料配布プロジェクトを始める事になりました。

活動開始当初は「経済的理由で生理用品が買えない方」の為に行っていたのですが、活動を継続していく中で出会った沢山の方々から「実際に悩んでいる事柄」や「なかなか打ち明ける事の出来ない思い」を知りました。そうした本人たちからの声を聞いていく中で、ふと、自分の10代の頃を思い出しました。改めて振り返ってみると、私自身も過去において当事者だったのです。

ここからは、私の過去の話になります。今から約25年前、私は家出を繰り返し路上少女になりました。テレビで取り上げられ話題になっていたトー横キッズのように、同じ境遇の子達といつも一緒に居ました。私

にとって同じ境遇の子達と居ることが居場所になっていました。その当時はスマートフォンもなくWi-Fiもない時代でしたので、プリペイド携帯で連絡をとり、いつもの場所でただただ仲間が来るのを待っていました。仲間が集まり、皆で食べ物を分け合い今日は何処に泊まるか？と相談をし、その日1日を生きる事だけを考えていました。私自身も「支援を必要としている子ども」だったのです。

活動を始めてから、多くの子ども達と出会いさまざまな話をしてきました。そんな中で気が付いたのは「私の10代の頃と状況は何も変わっておらず、むしろ悪化しているのではないか」という事です。今の子ども達はほぼ全員がスマートフォンを持っており、一歩外に出れば街中には自由に使えるWi-Fiがあり、SNS等で色んな人達と簡単に繋がれる環境です。一度も会った事がない人を「友達」と呼び、無意識に個人情報話を話してしまったり、相手から甘い言葉をかけられて遠く離れた場所まで会いに行ったりしてしまいます。それが例え、歳の離れた大人だったとしても、この人は良い人だ！自分の事を理解してくれる人だから大丈夫！と、一方的に勘違いしてしまい、結果としてさまざまな事件や犯罪に巻き込まれてしまうという事例が残念ながら起こっているのです。

私達JOYが支援している子達の中には、明らかにネグレクトを受けているとわかる子達がいます。中学校を卒業し働ける年齢になったらすぐ、高校の学費以外の全てをアルバイトをして稼がなければならない状況にある子達が沢山います。皆さんも想像がつくと思いますが、15歳の子が学校に通いながら働いたと

しても、稼げる金額は十分と言えるようなものではありません。その中から、通学定期券代、学用品、スマートフォンの料金、そして食費を自分で賄わなければならないのです。

具体的な事例として、現在も継続支援している子の話をしたいと思います。彼女は高校に入学し、学費以外全てをアルバイト代で賄っています。その事実を知るきっかけとなったのは生理用品の無料配布でした。彼女から「生理痛が辛いけど1人で病院に行くのが怖い」と相談され、それなら一緒に産婦人科に行こう！と約束をしました。約束した日、彼女と会うと身体を掻いていることに違和感を持ち、少し見せて欲しいと皮膚の状態を確認すると全身がアトピーの様に赤くなって血が滲んでいました。誰が見ても病院に行かなければならないと考えるような皮膚状態だったのです。彼女には両親が居るので何故ここまで放置されているのか、何故病院に連れて行ってもらえないのかを彼女に確認したのですが「自分で勝手に行けばいい」と言われており受診のためのお金をもらえず、自分のバイト代では病院に行けないということでした。それ以外でも彼女の話の色々と掘り下げていくと、シャワーや洗濯の時間、暖房の使用も母親が決めた時間しか使えず、炊飯器でお米を炊くという事も怒られるという事がわかりました。毎日の学校のお弁当は白米だけ。明らかにネグレクトを受けている状態に置かれているのですが、彼女自身は「他人も同じだと思っていた」とのことで、傍から見たら普通じゃない状況が、彼女には普通であったために「助けを求める事では無い」と思っていたそうです。家庭内の事は目に見えない事なので、何らかのきっかけがない限り明るみになる事はありませんし、本人は気づいていないので自ら助けを求める事ができないのです。

そういった状況を踏まえ、子ども達がSOSを出し

やすい環境を作る為に、私達JOYはインターネットの中をメインの活動場所にしています。年齢が低ければ低い程、自分以外の誰かに助けを求めるハードルが高いのではないかと感じています。何か困ったことがあった時に学校で相談すると保護者に連絡されるのではないかと聞いた事だったり、例え相談したとしても相談した相手がトラブルの内容を理解出来なかったりといったケースも考えられます。トラブルの内容も複雑になって対応するために専門的な知識を必要としたり、支援者が年々高齢化しているということもあり、支援者のスキルアップが急務だと実感しています。

今この会場にいらっしゃる皆様は分かると思いますが、私の見た目は世間一般的な支援者の見た目ではありません。御覧の通り派手な髪色で体にはタトゥーが入っています。パッと見た感じはマイナスのイメージしか持たれないかも知れませんが、この見た目のおかげで普段は自分から相談しないような子ども達が話しかけてくれるというメリットがあります。「この人なら相談してみてもいいかな」というきっかけの一つとして見た目の碎けた感じが受け入れられやすいのかもしれない。そこが第一歩となり、自分自身の体験や目に見えない障害を徐々にカミングアウトする事で「自分と同じ辛さを知ってる人なんだ」と親近感を持ってもらい、継続的な相談につながっているのではないかと考えています。

世の中にはたくさんの支援の方法があると思います。私達JOYの方法が全てではありません。支援をしたいと考える人が「自分に一番合う方法」を探し、令和の時代だからこそ出来る支援を各々が見つけて行くことが必要ではないかと思っています。専門職の人だけではなく、色々な人達が改めて繋がって情報共有をしていくことで支援の輪が広がっていくといいなと考えています。